

## 新人時代の思い出

高松 和美

私が関大職員として図書館に配属されたのは37年前のことである。まだ、図書館が現在の博物館がある建物（簡文館）にあったころだ。当時、代々の新人は（と記憶しているが）、仕事に行き詰ったり、泣きたいときには、書庫6階にあったレファレンス室へ、「カード繰込みに行ってきます！」と言って2箱ぐらいの分類カードを手にして今にも壊れそうなエレベーターに揺られながら行っていたようである。かくいう私も6階へよく繰込みに行った。窓を開けると（当時は、もちろん今の法科大学院棟や総合図書館もなく）第1グラウンドからアメフトの練習する声や野球をする声が響いてきてのんびりとした時間だけが過ぎていく…そんな雰囲気の中で、一人黙々と繰込みをするのが、楽しみだったのを今でも鮮明に覚えている。先輩に怒られた時や泣きたい時にはそこで思いっきり泣いて、また仕事に励むということもしばしばだったと思います。

また、私の花粉症の一因を作った「ウナギの寝床」と呼ばれた小さな部屋で古文書等を整理したことも簡文館時代の思い出の一つである。薄暗くて近くにあった『大蔵経』の表紙が金色だったためとても怖かったし、換気が悪かったのかアレルギーを引きおこして辛かった。当時は「花粉症」という言葉さえもない時代だったため、薬もあまりなく、マスクと分厚いメガネ（スキーのゴーグルのような分厚さ）をかけて仕事をしたことも今となってはいい思い出である。あの頃はのんびりな時代だったと思う。

昔は、図書館員の仕事にセルフカード作成と繰込みがあった。今はすべてコンピュータ化されているが、簡文館時代の図書館においてセルフカードは、図書館蔵書を示す大事なカードだった。ある日、いつものようにセルフカードを繰込みしていて、何枚かをカードボックスの上に置き忘れて帰宅したことがあった。翌日、当時の課長に「セルフカードは図書館の命である！粗末に扱うとは何事ぞ！」と叱られたことがあった。だから、私の中では今でもセルフカードは大事なものである。何年前かにすべてのカードを廃棄処分した時には、とてもさみしい思いをした。諸先輩方の書いたカードが、自分が書いたカードが廃棄されていく…とは、夢にも思わなかったからである。

時代のながれ…、今後、図書館はどういう発展を遂げていくのだろうか？楽しみであるし、関西大学図書館100年の中で、少ない年数ではあるが、自分が図書館員として仕事ができただことは誇りでもある。

（たかまつ かずみ）

## エレベーターにまつわる話

吉田 有輝

総合図書館内のエレベーターを利用した時に、通常のエレベーターに比べ、ゆっくりとした速度に感じたことはないだろうか。1階から3階までの移動に約30秒もの時間を要している。

その理由は、エレベーターの設計がロープ式か油圧式なのかの違いがある。関西大学第2学舎4号館内のエレベーターは、1階から3階までの移動を約20秒で行うことができる。このように、一般的な速度で動く設計はロープ式と呼ばれている。屋上などの最上部に巻上モーターなどの機械を設置する必要があるが、油圧式に比べると記述したように速度が速く、消費電力も少ない。一方の油圧式は、油圧パワーユニットと油圧ジャッキが圧力配管でつながれているため、ロープ式とは異なり、機械室の場所を建物内に自由に設計することができる。建物の上部に荷重が掛からないといった利点もあるが、ロープ式に比べると油圧ジャッキを用いているため、昇降行程および速度に限界がある。

関西大学千里山キャンパスの大半は、大阪府が昭和45（1970）年に風致地区に指定しており、建築物その他の工作物の新築・改築・増築又は移転を行う際は、建物の高さが地上15メートル以下であることが義務付けられている。総合図書館の設置場所も大阪府が指定した風致地区に該当しており、地下2階、地上3階からなる高さは、風致地区により指定されている15メートル以下の制限数値ぎりぎりの高さとなっている。

つまり、総合図書館の設置場所が風致地区に指定されている以上、これを満たす条件の下に建設せざるを得なかったのである。昭和50（1975）年12月17日に、各学部推薦の委員6名と学長推薦の委員4名（後に5名）および図書館長からなる関西大学図書館総合計画委員会が組織されたのを機に、昭和60（1985）年の総合図書館の開館までの間に機能やデザインを検討している段階において、建設する高さを考慮した結果、屋上に巻上モーターなどの機械を設置することができず、油圧式エレベーターを採用することになったと言えよう。

もし、風致地区という指定がなければ、総合図書館は地上3階以上の高さとなり、エレベーターも油圧式ではなくロープ式の設計になるなど、様々な機能やデザインが現在の総合図書館とは大きく異なっていたかもしれない。

（よしだ ゆうき）

## 泣き別れたり、親子になったり

嶋田 有理香

業界用語と呼ばれる、その職業ならではの言葉というものがあがる、図書館資料を語る上で外せない書誌の世界で出会う発想や用語にはどこことなく人間っぽさを感じさせるものもある。

図書館や本屋で検索システムを使うと目にする機会があるが、書誌には、誰が書き、どこの出版社がいつ刊行した資料なのか、等々の情報が記される。たくさんの資料を書誌という形で識別するため、基本的には同じ資料に対して書誌が二つ存在することはない。しかし、何らかの事情で図書館システムの中に書誌が重複して「生まれ」てしまっていることもあり、これを書誌の「泣き別れ」と呼ぶ。関西大学図書館では、かつて「1件の所蔵データに一つの書誌データ」という形を採っていたため、年鑑ものの書誌が年ごとに一つずつできていたり、上下巻の図書が上巻と下巻とでそれぞれに書誌ができていくという状態が起っていた。これは、データ作成を開始した時代の様々な事情によるもので、平成14(2002)年にNACSIS-CAT準拠の書誌データ(国立情報学研究所の総合目録データベースに登録可能な様式で作られた書誌データ)を導入するまで続いていた。今となっては、これは「泣き別れ」と言わざるを得ない状態であるため、このような場合には複数の書誌を一つにまとめて「きれいに」する。これは蔵書検索をする利用者のストレス軽減にも繋がるものであり、書誌や所蔵データを整備するためのワーキンググループを発足したこともある。

また、書誌には「親子関係」が存在することもある。例えば「岩波講座文学」というシリーズの『テキストとは何か』という図書の場合、「岩波講座文学」という「親書誌」があり、そのもとに『テキストとは何か』などシリーズの一つ一つの図書が「子書誌」として存在するという位置づけである。

このような「泣き別れ」や「親子」のほかにも、二つの異なる書誌の間につながりがある場合がある。雑誌が改題した場合の、前誌と後誌の書誌である。

例えば『月刊LASDEC: 地方自治情報誌』という雑誌の場合、その書誌には改題後の『月刊J-LIS: 地方自治情報誌』の情報が記述され、二つの書誌の間にはリンクを貼っている。つまり、図書館で『LASDEC』を蔵書検索した利用者がをクリック一つで後誌『J-LIS』の書誌にとべるようにしているのである。

このように書誌は別ものとして新たに作ることもなっても、図書館では多くの場合は改題後も引続き買い続けるため、発注のためのデータも新たに作る。改題するに至った出版社事情をちらっと想像しながら、改題雑誌があればその裏では今日も図書館員がデータをこしらえている。

(しまだ ゆりか)

## 貴重なのは本だけ？貴重書担当のつぶやき

大上 良樹

本学図書館の蔵書は現在約 220 万冊であるが、そのなかで貴重書と呼ばれるものは約 1 万 6 千点余りである。また、総合図書館には、増田文庫、泊園文庫、内藤文庫、長澤文庫、中村幸彦文庫、吉田文庫等の個人文庫が収蔵されているが、これらの文庫は、「研究者にとっての宝石箱や！」といっても過言ではないといえるほどの貴重な資料であり、遠方から他大学の研究者も閲覧、撮影に訪れている。

では、そうした貴重な資料を利用するにはどうすればよいのであろうか。実は、筆者は「貴重書の閲覧、貸出および複写」に係る業務を、平成 26 年度より担当することになったのだが、如何せん他部署から異動となり、それまで図書館システムの担当をしていたことで、接点も少なく、日々勉強に励んでいるところである。こうした中、日々問合せを受けることも多いのが利用手続きであるため、この場を借りて、極々基本的なこととなるがここで述べたい。

まず、利用者自身で、KOALA（関西大学図書館蔵書検索システム）を用いて資料検索を行い、資料の詳細を確認してもらう必要がある。その際、配置場所を確認の上、配置場所から利用を希望する資料を特定し、資料種別により各種申請書を利用目的に応じ作成、提出する流れとなっている。なお、貴重書関連の主な様式は以下のとおりである。

- 文庫（特別）閲覧願  
配置場所が「文庫（特別）」の資料を閲覧するための申請書
- 貴重図書・準貴重図書閲覧願  
貴重図書・準貴重図書を閲覧するための申請書
- 近世文書閲覧願  
図書館に所蔵されている近世文書を閲覧するための申請書
- 文庫（特別）複写許可願  
配置場所が「文庫（特別）」の資料を複写するための申請書
- 特別複写許可願  
貴重図書・準貴重図書・近世文書を複写するための申請書
- 掲載・刊行・翻刻許可願  
貴重図書・準貴重図書・文庫（特別）の資料を掲載・刊行・翻刻するための申請書
- ウェブ掲載許可願  
資料をウェブ上で掲載するための申請書

最後に、図書館事務室の現状についても少し触れておきたい。20 年前には 60 名いた図書館の専任職員も今や 20 数名となり、現在所属している専任職員の中で貴重書担当を経験した者は 2 名である。また、長年図書館に勤めていても貴重書担当を経験したことがない職員も多く、筆者に近い状況である専任職員も少なくない。とすれば、ある意味、資料だけでなく、貴重書の担当者自身も今や貴重といえるかもしれない。

（おおがみ よしき）

## 会長校のころ

金 東 瀧

関西大学が私立大学図書館協会の会長校であった平成 21（2009）年から平成 22（2010）年は、日本の図書館界が大きく動いたころであった。国立国会図書館は博士論文を電子化し、それを Web で公開するための手続を進めていたし、図書館界と書籍流通業界は RFID（IC タグ）を導入するためのガイドラインをとりまとめつつあった。国公私立大学図書館は電子ジャーナルのやむことを知らない価格高騰に対処すべく、コンソーシアムの連携強化を準備していた。スイスに本拠地を置く CERN（欧州原子核研究機構）からオープンアクセスの試みである SCOAP<sup>3</sup> への参加呼びかけがあったのもこのころのことである。

私立大学図書館協会では、そのころから次第に小規模な大学図書館が脱退していくようになった。大学が廃止されてなくなってしまうこと、あるいは協会活動に参加させられるだけの数の図書館員がいなくなったことなどが脱退の理由である。協会役員会には「脱退やむなし」と「大学廃止ならばやむをえないが、そうでなければ残留を説得せよ」とのふたつの主張があり、対応に苦慮した。関西大学は会長校として「残留を望む」立場から、小規模な大学図書館でも協会に加盟していることのメリットを感じられるような事業を協会活動に盛り込むことにした。そのひとつとして会長・北川勝彦先生の発案で「海外認定研修」制度を設計し実施した。研修先と日程を自分で設定できる自由度の高い制度である。先生は常から、図書館員が国際化に対応できる能力を身につけることを望んでおられたのである。

ICT 技術を活用した協会活動を望む声も強くあった。九州女子大学の高橋昇館長は、職員を研修に出せる機会が少ない小規模大学のために、研究会などの模様を Web により見られるようにしてほしいと、数年来、総会場でその必要性を説かれていた。それを受け、不十分ながら手始めに作ってみたのが、協会ホームページにある「インフォメーションサービス」という名前の電子掲示板である。高橋先生の要望には応えることはできなかったが、少しは前進したように思う。そこでは「図書館長からのリレーメッセージ」を企画した。理事校や総会、研究会会場校の図書館長から投稿をいただき、掲載メッセージは 30 を数えることができた。

関西大学が会長校に就任したのは昭和 50（1975）年以來二度目である。本学図書館長の市川訓敏先生と北川勝彦先生が会長となった。東地区の部会長が青山学院大学・山本吉宣先生、西地区の部会長は同志社大学・真銅正宏先生と百合野正博先生が務められた。

東の監事校は中央大学、西は大阪学院大学。総会・研究大会の会場校は佛教大学、同じく翌年、西南学院大学。研究助成委員長校は立教大学。協会賞審査委員長校・慶應義塾大学。ホームページ委員長校・中央大学。国際図書館協力委員長校は立命館大学という布陣。

さらに国公立大学図書館協力委員長校が慶應義塾大学と筑波大学で、大学図書館協力ニュース編集主査校が東京学芸大学であった。

多くの大学で催される委員会や研究会に出席し打ち合わせをするために、東京を中心に京都・九州・名古屋への出張が年間 20 回ほどになった。事務職員としては十分な、一生分の出張であった。

(きん とうえい)

## 『コアラ博士』にまつわるあれこれ

松本 和剛

関西大学図書館にはマスコットキャラクターが存在する。そう、本学関係者なら誰もが知っている、とは言えない、絶大な人気を誇る、ともとても言えない、知る人ぞ知る、あまり「ゆるくない」キャラクター、その名も『コアラ博士』である。名前のおりコアラの博士なのだが、詳細なプロフィールはひと段落後で。

さて、このキャラクターが誕生したのは今から6年前のことで、かの有名なゆるキャラたち、滋賀県のネコより1年遅く、熊本県のくまのそれより2年早い誕生であった。平成20（2008）年に新入生向けのオリエンテーション用ビデオでその愛くるしい容姿を初披露したのを皮切りに、平成22（2010）年には、これまでパンフレットや講義型のガイダンスなどでその利用方法等を説明してきた本学蔵書検索システム KOALA（[Kansai University OPAC for the Library](#)）を、利用者が自宅などの館外からでも活用できるようにと、図書館ウェブサイト上にてオンデマンド形式でガイダンスビデオを配信提供することになった際、そのストーリー進行上のガイド役としてコアラ博士が大抜擢されたのである。

ここで、本学図書館の広報誌である KULione（クリオネ）Vol.1 に公開されたコアラ博士のプロフィールを一部抜粋して紹介することにする。

通称 コアラ博士

本名 子守熊 関太郎（こもりぐま かんたろう）

特徴 コアラ型ロボット。主食がユーカリなだけに生粋の草食系博士。眼はいい。伊達メガネである。

趣味 木登りは滅多にしない。（高所恐怖症）

好きな言葉 「新刊書」。また、なぜか「ロッチェ」や「マーチ」という言葉に敏感。

目標 一人でも多くの学生が図書館に来て本に親んでもらえるよう、日々研究やPR活動に励んでいる。いずれは世界的な図書館PR大使になるのが夢。

このプロフィールは図書館某職員が後付けで設定したものであるが、この一見おふざけのような設定の裏には、コアラ博士という存在に何か少しでもインパクトを感じ、そこから本学図書館に関心や興味を持ってもらって、ひいては足を運んで有効活用してほしいという、図書館広報担当としての煮え

滾る油の如き激情が詰まっているのだという。こうして、本学図書館の情報発信力、広報力の強化・推進に向け、微力ながらもコアラ博士が一役買う形になったのである。

現在、ガイダンスビデオをはじめ、図書館カレンダーである KULendar のカバーモデル、広報誌 KULione のご意見番にと、コアラ博士はその存在感を増す勢いである。彼の活躍が今後の図書館の広報戦略の将来を占うのか、はたまた、新たなライバル（キャラクター）の出現により違った展開を見せるのか、その動向に是非ともご注目いただきたい。

（まつもと かずたか）





## 広報誌『KULione』誕生秘話

白髪 友賀

広報誌『KULione (クリオネ)』は平成24(2012)年10月に創刊された。それまでも、年刊の機関誌として『図書館フォーラム』(平成7(1995)年創刊)が刊行されていたのだが、こちらは図書館にかかわる研究発表および活動記録の場として機能する、どちらかといえば、教員や図書館関係者向けのものだった。多くの大学図書館で、学生の来館促進活動が過熱するなか、本学も遅れをとるまいと、学生にターゲットを絞った広報誌をつくることとなったのである。

まず誌名をどうしようかということになり、図書館内で募集したところ、予想外にたくさん案が集まった。16もの誌名案の前に、担当者だけでは決められないということで、誌名総選挙を敢行。図書館スタッフ全員による投票を経て、最も多く票を獲得したのが『KULione (クリオネ)』であった。50代の男性職員が、“コアラ博士(本学OPACの愛称KOALAより派生した本学図書館キャラクター)の愛弟子で図書館情報学を専攻するクリオネちゃんが、新キャラクターとして加わるというのはどうでしょうか”というメッセージつきで発案してくれた、なんとも可愛らしすぎるものであった。

発案者によると、Kansai University Library is the one and only から略号をとったものとのことであったが、よりふさわしい意味を持たせるべく、Kansai University Library's Info for everyone という肉付けをほどこした。

手探りでありながらも、なんとか発行に漕ぎ着けた創刊号は、誌面作成に貢献してくれたインターンシップ参加学生2名と前図書館長、新図書館長の計4名に表紙を飾ってもらい、華々しい船出となった。現在も引き続き、ホットな話題提供とポップな誌面作成を念頭におき、年2回のペースで刊行を続けている。

さて、クリオネに決まったからには、クリオネちゃんを誕生させなければいけないのだが、未だに産声をあげていない。クリオネといえば、紅い内臓が透けて見えるゼリーのような体をひらひらさせて、冷たい海のなかを舞う姿が美しい。クリオネは、ギリシア神話に登場する学芸の女神たちムーサ(英語名ミューズMUSE)の二柱クレイオー(Κλειώ, ラテン語形 Clio)に由来し、歴史を司る彼女の名前には「祝福する女」の意味があるそうである。なんだか図書館広報誌としてピッタリの誌名を得たように思えてきた。いつかクリオネちゃん誕生秘話を書けるよう、そしてKULioneがより学生に親しんでもらえる存在となるよう、これからも誌面作りに邁進したい。

(しらかみ ゆか)

## 本と夢を運んだエレフト

芝谷 秀司

私が図書館事務室に配属された平成 22（2010）年には、総合図書館にはまだ辛うじてエレフト（自走式図書搬送装置）なる設備が存在した。1階の各カウンターからファックスで請求された地下書庫の資料は、エレフトと呼ばれるアタッシュケースぐらいの大きさの箱に入れられて1階まで運ばれ、利用者の手に届けられていたのだ。ある先輩職員の話では、旧千里山図書館（現簡文館）時代は、利用者からの請求があれば図書館職員が書庫の1階から6階まで階段を昇降して資料を探し提供していたそうである。その頃の図書館職員にとって、エレフトはまさに夢のような存在であったろう。

それまで教育後援会が保護者向けに製作した大学紹介映画の中ではエレフトの映像を見たことがあった。学生時代、前述の旧千里山図書館で勉学に勤んでいた自分としては、図書館も随分オートメーション化されたなあと感心したものである。しかし、エレフトを実際にこの目で見たのも、エレフトという名前であるということを知ったのも図書館に配属されてからのことであった。利用者が心待ちにする資料を乗せ、ゆっくりと弧を描いて天井の中へ消えていく美しいフォルムは、近未来の交通機関を連想させるものであった。

このエレフトで最も印象に残っているトピックスは、平成 22（2010）年度に吹田市立千里第二小学校の3年生の生徒たちが図書館見学に来てくれた時のことである。3階の図書館ホール（現多目的閲覧室）を使って子どもたちの質問に答えることになっていたのだが、何か視覚に訴えかけるものがあれば子どもたちも退屈しないで済むだろうと思い、エレフトの動画を上映してみた。新入生ガイダンス用ビデオの中の十数秒程度の短い映像であったが、みんな予想以上に興味を示してくれた。書庫内のレールをアップダウンを経て搬送されていく美しい姿には、子どもたちの夢を掻き立てる何かがあったに違いない。しかし、「エレフトがこわれた時はどうしますか？」という鋭い質問が私を現実に戻した。これまで本と夢を運んできたエレフトも、老朽化によりたびたび搬送途中でストップしたり、修理のための部品調達も困難になってきたりという状況になっていた。かつて総合図書館の花形として活躍したエレフトが、時代とともに難物として扱われるようになってきたのだ。そして平成 23（2011）年度の図書館リニューアル工事ですべて撤去されてしまい、現在は小荷物昇降機というなんとも情のない名前の機械が地下2階から2階の間に設置されている。たった1年の短い

合いであったがすっかりテレリフトのファンになっていた私としては、世の無常を感じざるを得ない出来事であった。

(しばたに ひでし)



## LOUIS VUITTON

加藤 博之

図書館に着任してしばらくした頃だったと思う。私が所属していた運営課（当時）は、普段は比較的静かな部署だったが、にわかに「ヴィトン、ヴィトン」と騒がしくなった。何事かと訝しんでいたが、聞けば、関西大学図書館は日本で一番古いヴィトンのトランクを収蔵しており、そのトランクが本日久々に出陳されるので、我々も見ることができる、とのことであった。平成16（2004）年の晩夏のことだったと記憶している。

これは、ルイ・ヴィトンの創業150周年を記念して、兵庫県立美術館、読売新聞大阪本社、読売テレビが同年に主催した「Universal Symbol of the Brand ルイ・ヴィトン 時空を超える意匠の旅」という特別展へ、同資料が出品依頼を受け、その引渡手続きを館内で行った日の運営課の一コマであるが、何故このような資料を関西大学図書館が収蔵していたのであろうか？

話は19世紀末のフランスに遡る。フランス、パリのルイ・ヴィトン本社にある顧客名簿には、このトランクの製造年は明治5（1872）年で、販売したのは明治17（1884）年9月2日、当時の値段で1800フラン、顧客名は小倉久と記録されている。小倉久は、明治9（1876）年に司法省法学校卒業後、フランス留学を命じられ、約3年の歳月を経て帰国。様々な官職を経て明治19（1886）年頃から関西大学創立の事にあたり、のちに初代校長となった人物である。顧客名簿にある明治17（1884）年は、小倉久が明治政府の官吏としてポルトガルのリスボンで開かれた万国国際会議に出席していたところで、この旅程においてルイ・ヴィトン本社に立ち寄り購入したものと思われる。小倉の没後、このトランクは小倉家から関西大学に寄贈されたが、その際に温湿度が一年を通じて一定に保たれている図書館の貴重書庫が保管場所として最適と判断されたのであろう。

このトランクは、今は図書館から年史編纂室という部署へ移管され、図書館職員が実物を見る機会は得難くなった。明治時代のモダニズムと、東洋と西洋が邂逅したロマン、そして関西大学の歴史を肌で感じることのできる貴重な資料であると思う。

（かとう ひろゆき）



小倉久が使用していたトランク